

元総社蒼海遺跡群(120)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 6 . 9

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群(120)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



調査地点と周辺地形の変遷過程
(●は調査地点)

2 0 1 6 . 9

前橋市教育委員会

はじめに

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、縄文時代の遺跡も、市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（120）は、上野国府推定区域や上野国分僧寺・国分尼寺などの施設を擁する古代上野国の中核地域であり、多くの注目が集まっております。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出・確認はかないませんでしたが、古代から中世にかけての掘立柱建物跡、溝跡などが見つかりました。今回の調査成果をはじめとしてこれまでの調査成果の蓄積は、国府や国府のまちの姿を再現するための資料と考えております。残念ながら、現状のままでの保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができます。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、記録的な猛暑そして寒風の中、発掘調査担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成28年9月

前橋市教育委員会
教育長 佐藤博之

例　　言

- 1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（120）埋蔵文化財発掘報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（120）	調査場所	前橋市元総社町 1411-1・1411-2
遺跡コード	27 A 223	発掘・整理担当者	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 28 年 1 月 31 日～平成 28 年 2 月 5 日		
整理・報告書作成期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 28 年 9 月 30 日		
- 3 本書の原稿執筆は I を小峰 勝（前橋市教育委員会）、他を中村が担当した。
- 4 発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。

飯島冬子 大川明子 太田英明 加藤知恵子 神坂慶三 北爪二郎 今野妙子 佐藤和彦 佐藤文江
田島君代 部田井美紗子 土屋和美 中野光雄 岩山勝利 星野 博 松本徳雄 丸山和浩 吉澤克夫
- 5 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管している。
- 6 下記の諸氏および機関に、ご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

木津博明 永井智教 日沖剛史 山下歳信 山下工業株式会社

凡　　例

- 1 挿図中に使用した北は座標北である。
- 2 插図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
- 3 遺構名称は、掘立柱建物跡：B、溝跡：W、土坑：D、ピット：P である。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構	掘立柱建物跡・土坑・ピット・・・	1/60	全体図・・・	1/100	遺物	土器・・・	1/3
----	------------------	------	--------	-------	----	-------	-----
- 5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。
- 6 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下のとおりである。 遺物 須恵器（還元焰）：■
- 7 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B（浅間 B 輪石：1108）、Hr-FP（榛名二ヶ岳伊香保テフラ：6 世紀中葉）、
Hr-FA（榛名二ヶ岳渋川テフラ：6 世紀初頭）、As-C（浅間 C 輪石：3 世紀後葉～4 世紀前半）

目　　次

はじめに　例言・凡例

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	1
III	調査の方針と経過	
1	調査範囲と基本方針	6
2	調査経過	6
IV	基本層序	7
V	遺構と遺物	
（1）	掘立柱建物跡	8
（2）	溝跡	8
（3）	土坑、ピット	8
（4）	遺構外出土遺物	9
VI	発掘調査の成果と課題	11

I 調査に至る経緯

平成28年1月14日付けで前橋市長 山本 龍（区画整理課）より元總社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に発掘調査を実施中であり、市教委直営による発掘調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。

平成28年1月27日付けで前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元總社蒼海遺跡群（120）」（遺跡コード：27A223）の「元總社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、（120）は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。



Fig.1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 (Fig. 1) その名に国府関連地名を冠する元總社町は、前橋市の南西部に位置し、元總社蒼海遺跡群は、その北西域を占める。利根川を越えて約3km東には群馬県庁をのぞみ、国道17号線と関越自動車道の結節点となる前橋インターチェンジへは南約2kmの立地である。遺跡地は1960年代まで、主に畠地だったが、前橋市街地から広がる開発の波は元總社町にもおよび、蒼海遺跡群の東部と南部は宅地化が進んできた。さらに近年では、元總社蒼海土地区画整理事業の進展によって、新旧の景観が混濁した過渡的な様相の中にある。

遺跡地は、榛名山南東麓に伸びる相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行地帯にある。約2万年前、浅間山は山体崩落を起こし、前橋泥流が生じた。十数メートルも堆積した泥流層は前橋台地の母体となり、その表層には川が流れた。この頃の元利根川は、現利根川よりも西側の總社や元總社の辺りを流れていたと考えられている。約1.8～1.3万年前、榛名山の山体崩落によって陣場岩屑などが発生し、その堆積物が相馬ヶ原扇状地の母体となつた。約1.1万年前、遺跡地の周辺は、元利根川の作用によって後背湿地化が進んでいたらしく、井戸跡などの深部には前橋泥炭層が観察できる。元利根川が残した低地はその後、相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの流れに影響を与えた。これらの中小河川は榛名山の裾野を南東へ流れるが、低地の影響を受け、ちょうど遺跡地の辺りで流れを大きく南へ変える。急激な流れの変化は洪水の温床となり、度重なる洪水層が堆積した結果、遺跡地の周辺には約25mの深さにも及ぶ總社砂層が形成された。總社砂層の堆積と中小河川の開析作用の反復は、わずかな高台と低地を残しつつ台地を形成した。台地が安定すると、中小河川の流れも現在の場所に落ちingいて、今日に至るまで下刻を続いている。台地の上部には黒ボク土が形成され、歴史時代に起きた度

重なる火山災害や人為的な地形改変の累積を経て、台地表層は次第に平坦化してきたと考えられる。

歴史的環境 (Fig. 2・3、Tab. 1) 紙数の都合上、国府周辺地域を見据えた広域的な叙述は既存の報告書にたのみ、ここでは、本地点の様相に合わせて、地域と時期を限定する。

元総社蒼海遺跡群にて現在、総社砂層より上位で確認される最も古い遺構は、縄文時代前期に遡る。遺構の覆土には黒ボク土が混入することから、台地上に黒ボク土が形成されたのは、この直前と考えられる。該期の竪穴住居跡は、蒼海遺跡群（3・4・13・率以下「蒼海」）・小見V～VI遺跡などで確認され、本地点でも土器片が出土した。染谷川左岸に沿うようにして帯状の分布を示すが、この一帯は、総社砂層の堆積が完了した段階で、染谷川の作用により、南北に長い自然堤防が形成されていたと推測できる地帯である（VI章後述）。続く中期の竪穴住居跡は、蒼海（3・40・41）・小見内VI遺跡などに確認される。前期よりも自然堤防の北方にやや偏り、面的に分布する。蒼海（10）を除くこの一帯は、自然堤防の北端と、榛名山南東麓の最末端にあたり、緩やかな南斜面で、広い微高地を確保できる地帯である。

本地点では、平安時代の遺構を確認した。該期の遺構分布は、奈良時代にも増して拡大し、各地点に中小規模の住居跡が数多く存在する。国衙、国司館や市・津、それらの機能を支えた宿丁が一時滞留する宿所的集落など、上野国府城の空間構成の検討は、歴史地理学的な手法によるところが大きかったが、近年では発掘調査の進展によつて、城内における地点ごとの考古学的な差異が、おぼろげながら把握されつつある。例えば、国府城の北東端にある牛池川右岸の蒼海（37・39・53）などでは、特に多くの住居跡が確認され、馬具・小札・刀装具・鉄鎌など武器・武具の出土が目立つ。また、国府城の北西端で国分僧寺・尼寺にも近い、蒼海（26・40・41）、小見II遺跡などにも、住居跡が高い密度で分布する。この地点は、腰帶具・円面鏡の出土率が高く、鉄鉢形土器・双耳壺・三足盤・金の付着した灰釉陶器などの特徴的な遺物や、「大館」「市」「金」などの墨書き土器が出土している。なお、本地点が位置する染谷川自然堤防上は、国府城の西端にあたる。蒼海（3・13）、小見遺跡などでは、自然堤防尾根上を南北に縱走する道路状遺構が確認されており、本地点はその東に隣接する。縄釉陶器の出土が多い国府城の中でも、特に高い出土率を示す一帯でもあり、蒼海（8・13）では合計49点もの破片が出土している。平安時代中期、国府城は平将門の乱の舞台となった。将門は天慶2年（939年）に国衙を攻略するが、これに関わる考古資料は、現在のところ確認されていない。



Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	調査年度	時代・主な遺物・性質
1	元代青白釉高足碗(120)	16	宋元期青白釉
2	施釉・素胎・青白釉	17	引鉢形・盤形・青白釉
3	施釉・素胎	18	引鉢形・青白釉
4	施釉青白釉	19	宋元中後期青白釉
5	大口鉢形器・大口盆形器	20	宋元中後期青白釉
6	施釉青白釉直口器	21	宋元中後期青白釉
7	施釉青白釉直口器	22	宋元中後期青白釉
8	施釉青白釉	23	宋元中後期・官窯青白釉直口器
9	元代青白釉高足盤(2)	24	宋元中後期青白釉
10	青白・青釉高足盤	25	宋元中後期青白釉
11	施釉・青白・青釉	26	宋元中後期青白釉
12	元代青白釉高足盤	27	宋元中後期青白釉
13	土器部分青白釉直口器	28	土器部分青白釉直口器
14	元代青白釉・灰陶・青白釉	29	土器部分青白釉・灰陶・青白釉
15	陶器・瓦器	30	青白・青白釉直口器
番号	遺跡名	調査年度	時代・主な遺物・性質
-	元代青白釉高足碗(1)	2005	古風～平安期・白磁器・施釉青白釉・高足・道路汎用器・李朝・唐朝(青白釉)・磁北土器(前庭)・織物・灰陶・白・二段鉢・鉢底・鉢蓋・青白釉・綠釉
-	元代青白釉高足碗(2)	2005	唐風・平安期・白磁器・施釉青白釉・土器・青白釉・道路汎用器・織物・灰陶・青白釉・織物・高麗・青白釉・織物
-	元代青白釉高足碗(3)・元代青白釉直口器	2005	漢魏・後漢・後晉・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・瓦片・瓦筒・道路汎用器・織物・高麗・中華・官窯・磁北土器(前庭)・灰陶・白・二段鉢・鉢底・鉢蓋・青白釉・綠釉
-	元代青白釉高足碗(4)	2005	魏晉・後漢・西晋・青白釉・青白釉・施釉青白釉・空腹器・青白釉・織物・高麗・金・官窯・磁北土器(前庭)・白・二段鉢・鉢底・青白釉・綠釉
-	元代青白釉高足碗(5)	2005	古唐・後漢・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・瓦筒・道路汎用器・織物・高麗・土器底・火葬器・官窯青白釉・織物・高麗・火葬器
-	元代青白釉高足碗(6)	2005	古唐・後漢・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・瓦筒・道路汎用器・織物・高麗・土器底・火葬器・官窯青白釉・織物・高麗
-	元代青白釉高足碗(7)	2005	平安期・高麗人・人頭・骨頭・削鉗頭・中華・火葬器・官窯青白釉・織物・高麗・火葬器
-	元代青白釉高足碗(8)	2006	古唐・後漢・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・瓦筒・道路汎用器・織物・高麗・土器底・火葬器・官窯青白釉・織物・高麗
-	元代青白釉高足碗(9)・(10)	2006	魏晉・後漢・後晉・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・空腹器・施釉青白釉・官窯・磁北土器(前庭)・織物・高麗・火葬器
-	元代青白釉高足碗(11)	2006	古唐・平安期・白磁器・施釉青白釉・高麗・瓦當・立柱物・青白釉・高麗・火葬器・官窯・瓦當・白・二段鉢・火葬器
-	元代青白釉高足碗(12)	2006	古唐・後漢・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・瓦筒・官窯・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(13)	2006	魏晉・後漢・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・瓦筒・道路汎用器・中華・土器底・官窯土器(前庭)・織物・高麗
-	元代青白釉高足碗(14)	2006	古唐・後漢・唐・五代・宋・青白釉・官窯・施釉青白釉・高麗・瓦當・白・二段鉢・火葬器
-	元代青白釉高足碗(15)	2008	秦漢・平安期・官窯・中華・土器底・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(16)	2008	秦漢・平安期・官窯・中華・火葬器
-	元代青白釉高足碗(17)	2008	古唐・後漢・唐・五代・宋・平安期・瓦当類・官窯・土器底・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(18)	2008	平安期・官窯・中華・土器底・火葬器・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(19)	2008	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(20)	2008	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・空腹器・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・官窯青白釉・織物器(前庭)・火葬器・官窯・瓦當・白・二段鉢
-	元代青白釉高足碗(21)	2009	秦漢・平安期・官窯・中華・土器底・官窯・瓦當・火葬器
-	元代青白釉高足碗(22)	2009	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・瓦当類・瓦筒・官窯・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(23)	2009	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・瓦当類・瓦筒・官窯・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(24)	2009	魏晉・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯・瓦当類・官窯・施釉青白釉・中華・方枕瓦片・道路汎用器・官窯土器(前庭)・火葬器
-	元代青白釉高足碗(25)	2009	古唐・平安期・官窯・瓦当類・施釉青白釉(12・14c)・[国]A(重要指定)
-	元代青白釉高足碗(26)	2009	角・直筒・自唇式・平安期・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(27)	2009	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・空腹器・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(28)	2009	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・空腹器・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(29)	2009	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・空腹器・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(30)	2009	古唐・平安期・官窯・中華・土器底・官窯・施釉青白釉(12・14c)・[国]A(重要指定)
-	元代青白釉高足碗(31)	2009	古唐・後漢・中華・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(32)	2010	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(33)	2010	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(34)	2010	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(35)	2010	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(36)	2010	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(37)	2011	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(38)	2012	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(39)	2012	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(40)	2013	魏晉・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(41)	2013	[重要文化財]
-	元代青白釉高足碗(42)	2013	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(43)	2013	古唐・平安期・中華・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(44)	2013	古唐・平安期・官窯・中華・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(45)	2013	古唐・平安期・官窯・中華・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(46)	2013	平安・豆甕
-	元代青白釉高足碗(47)	2013	中華・官窯・青白釉・豆甕
-	元代青白釉高足碗(48)	2013	魏晉・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具
-	元代青白釉高足碗(49)	2013	平安・官窯・中華・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(50)	2013	平安・官窯・中華・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(51)	2013	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(52)	2013	古唐・後漢・唐・五代・宋・官窯・施釉青白釉
-	元代青白釉高足碗(53)	2013	[重要文化財]
-	元代青白釉高足碗(54)	2013	古唐・平安期・官窯・中華・施釉青白釉・官窯土器(前庭)・火葬器・火葬具

国府域の空間構成復元を困難としている要因の一つとして、蒼海城【i】の大規模な地形改変がある。国府推定域内に位置する、蒼海（23・29・65）などでは蒼海城中枢部の堀跡群が、蒼海（21）では、二の丸に展開する無数の柱穴群が確認され、その帰属時期は15世紀を中心とする。蒼海城に関連する遺物としては、蒼海（23・25）で、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・梅腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。

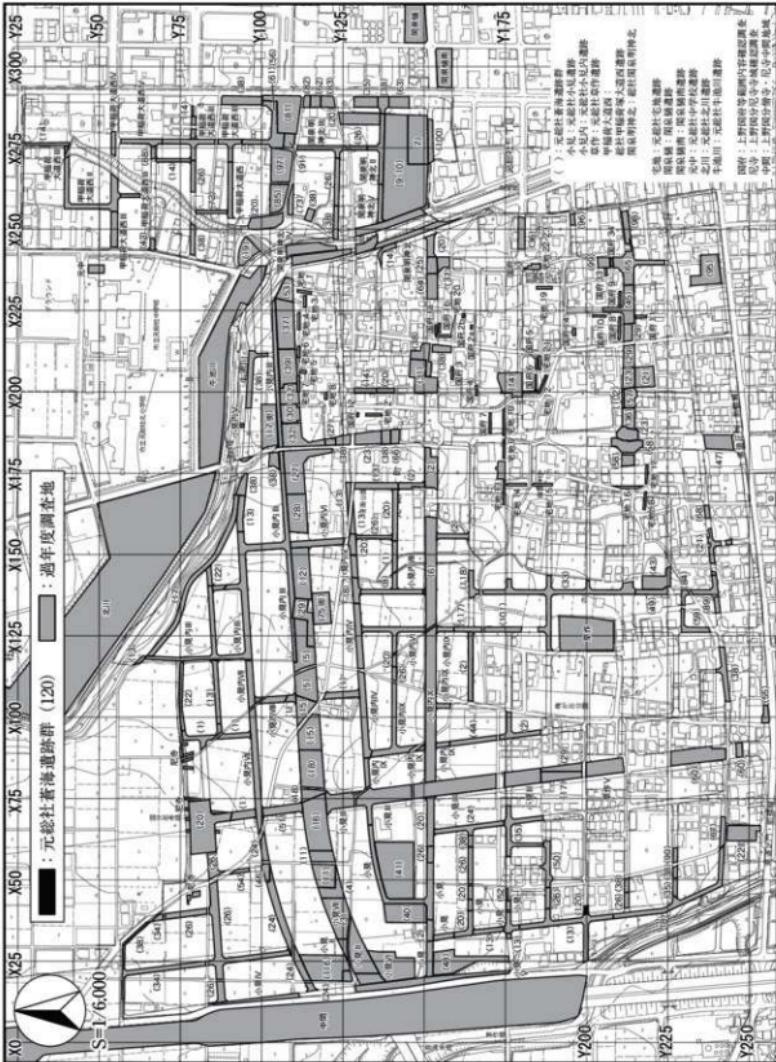


Fig.3 元総社蒼海遺跡群位置図とグリッド設定図

III 調査の方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社舊海土地区画整理事業の道路予定地であり、調査面積は85 m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000, Y = - 72200.000を基点とする4 mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。各調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系）
(120) X 40, Y 200	X = 43200.000 m, Y = - 72040.000 m	X = 43554.9143 m, Y = - 72331.7570 m

発掘調査は、遺構確認面まで重機（0.25 m³級バックホウ）を用いて表土の除去を行った。遺構確認面を判断するため表土除去と並行して、調査区南東隅に扒掘り状の深掘りを行い（基本層序①）、早々に基本層序の確認を行った。表土除去後の遺構確認面は、ジョレンを用いて全面的な精査を行い、色調・夾雜物などの差異による平面的な土質の観察によって遺構を判断した。確認した遺構は、土層の堆積状況を確認するために、土層断面を適宜残しつつ覆土の除去を行った。遺構底面直上出土など、遺構に伴うと判断できた遺物については、出土位置を記録した上で取り上げた。遺構の調査後、確認面に残る不鮮明なシミ状の平面プランに対して、半裁による掘り下げや、サブトレーナーでの断ち割りによる断面観察を行ったが、いずれも人為との判断はできなかつたため、図化と写真等の基本的な記録のみに留め、報告は行わなかった。また、調査区の界隈に旧地形の変換点を想定することができたため、調査の最終段階で、調査区南西隅に扒掘り状の深掘りを行い（基本層序②）、調査区東西の基本層序を比較観察した。

個々の遺構の図面記録は、基本的に遺構の断面図・完掘時の平面図・遺物の出土位置について、トータルステーション・電子平板を用いてを行い、断面図の一部はオルソフォトに変換して編集を行なった。写真記録についても、遺構の土層断面・完掘状況・遺物出土状況に対して、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（Canon EOS55- EF28-105mm/ACROS・ISO100/PROVIA・ISO100）とデジタルカメラ（Canon EOS50D・SIGMA DC18-200mm）を用いて、基本的には絞り値 f 8 ~ 11・広角端での撮影を行った。

報告書の作成に際しては、DTPの手法を用いた。遺構図については、原図の作図から報告書掲載の編集団に至るまで一貫してデジタルデータを用い、遺物図については、手測りでの原図作成後デジタルトレースを行つた。遺物写真的撮影にはデジタルカメラ（Canon EOS 5 D/EF200mmL）を用いた。データ化されたこれらの調査記録を、レイアウトソフトを用いて組版し、刊行した。

2 調査経過

発掘調査は、平成28年1月31日から着手した。表土層は当初の想定よりも極めて浅く、重機による表土除去は順調に進み、同日中に基本層序と遺構の確認を終えた。2月1日から個々の遺構調査を開始。翌2日には全ての遺構を完掘し、調査区の全景写真撮影を行つた。3日に、不鮮明なシミ状の平面プランや調査区南西隅の基本層序など補足的な調査を行い、4日、前橋市教育委員会による終了確認がなされ、5日には調査区を埋め戻した。

整理作業は、平成28年4月1日から着手した。同日に遺物の洗浄、6日に註記を行つた。18~26日に遺構図面の編集作業を行い、27日~5月9日にかけて遺構図面の版下を作成した。10~12日に、出土遺物の分類と報告対象の抽出を行い、16~18日に遺物実測とデジタルトレースを経て、19日に遺物図面の版下を作成した。原稿の執筆と組版は5月9日から隨時行った。6月1日に出土遺物の写真撮影を行い、2日に掲載写真の抽出と版下を作成した。27日には原稿執筆と組版を終了。前橋市教育委員会による査読の後、9月18日に入稿した。19~29日にかけて遺物台帳等調査資料の整理を行い、9月30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

IV 基本層序

現況の地表面は、宅地の造成によって著しい削平を受けていた。表土は発達しておらず、周辺の調査区に広く分布する As-B や As-C の混土層はほとんど観察できなかった。ただし、遺構の覆土には、これらの層に起因する土壤が含まれるため、本来は存在していたと推測できる。現在の表土や、近現代の耕作土である I・II 層は、ビニールや被覆線の小片を含む。その直下には、総社砂層への漸移層である III 層が堆積し、この層の上～中位を遺構確認面とした。IV 層以下は総社砂層である。堆積は厚く、以下の層序を確認することはできなかつたが、層中は幾層にも細分できる。それらはシルト質土を主体とする層と、砂質土を主体とする層に大別でき、調査区の東端ではシルト質土の堆積が顕著であるのに対して、西端では砂質土の堆積が厚い。その傾向は VI 層以下に顕著で、西端の IX・XI 層には葉理構造が発達しており、堆積の要因に水流の影響を仮定することができる。

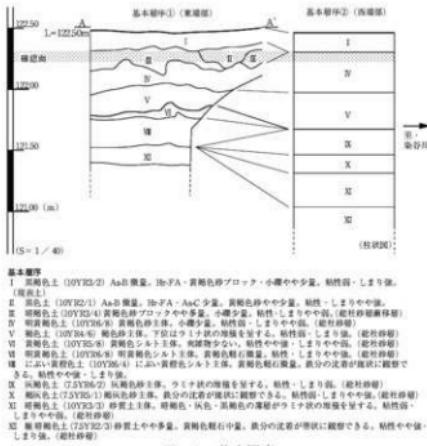


Fig. 4 基本層序

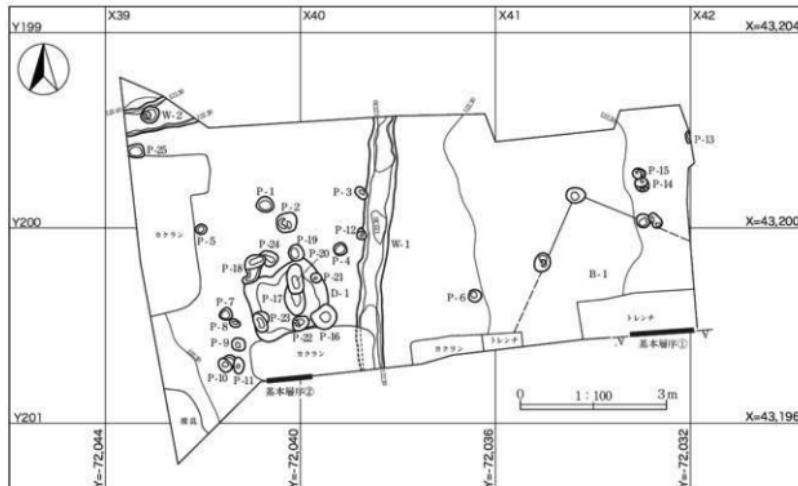


Fig. 5 全体図

V 遺構と遺物

調査地点は後世に著しい削平を受けているためか、確認できた遺構は少ないが、掘立柱建物跡1棟・溝跡2条、土坑1基・ピット25基を調査した。遺構の残存状況は悪く、出土遺物も非常に少ない。しかしながら隣接する、蒼海（8・13・26・38・50）などの調査地点では、縄文時代前期後葉・古墳時代後期～平安時代の遺構が確認されていることを鑑みると、本調査地点では相当数の遺構が、削平によって消失している可能性がある。

(1) 掘立柱建物跡

B-1号掘立柱建物跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X 41、Y 199・200 主軸方向 N - 21°- W 規模 (3.81 m) × (2.79 m)。東側と南側は調査区外に展開すると推測する。柱穴 3基調査した。P 1は長軸0.38 m × 短軸0.32 m × 深さ0.24 m、P 2は長軸0.41 m × 短軸0.32 m × 深さ0.24 m、P 3は長軸0.27 m × 短軸0.26 m × 深さ0.12 m。芯々距離は1.50 mの等間を示す。柱穴底面標高は121.93 m～122.05 mを測る。覆土 いずれの柱穴覆土も、As-Cが混入する黒褐色土を主体とする。出土遺物 P 1の覆土中から、わずかに土師器甕が出土したが、細片のため図示しなかった。

時期 遺物に乏しいため細かい時期は不明だが、As-Cを含む黒色土の土質と、出土遺物の全体的な時期別分布状況から推測するに、おおむね8～10世紀と考える。

(2) 溝跡

W-1号溝跡 (Fig. 6, PL. 1)

位置 X 40、Y 119～200 主軸方向 N - 5°- E 規模 長さ (5.18 m) 上幅 0.58 m 下幅 0.35 m 深さ 0.14 m 形状等 南北方向に走向する。断面U字状を呈する。重複 P-3・12と重複し、新旧関係はP-3・12→本遺構である。覆土 As-Bをやや多量含む。出土遺物 覆土中から、わずかに須恵器皿と土師器甕が出土したが、細片のため図示しなかった。時期 遺物に乏しいため細かい時期は不明だが、覆土にAs-Bを多く含むことから、おおむね12世紀以降と考える。

W-2号溝跡 (Fig. 6)

位置 X 39、Y 199 主軸方向 W - 12°- N 規模 長さ (1.55 m) 上幅 0.73 m 下幅 0.53 m 深さ 0.17 m 形状等 東西方向に走向する。断面U字状を呈する。覆土 As-Aをやや多量含む。出土遺物 なし。

時期 覆土にAs-Aを多く含むことから、おおむね18世紀以降と考える。

(3) 土坑、ピット (Fig. 6～8、PL. 1・2)

土坑は1基、ピットは25基を調査した。これらの遺構は、①As-C混入黒色土を含む覆土、②As-CとHr-FAを含みAs-Bを含まない覆土、③As-Bを含む覆土の3類に大別した。②に分類できるP-18の覆土下層からは、

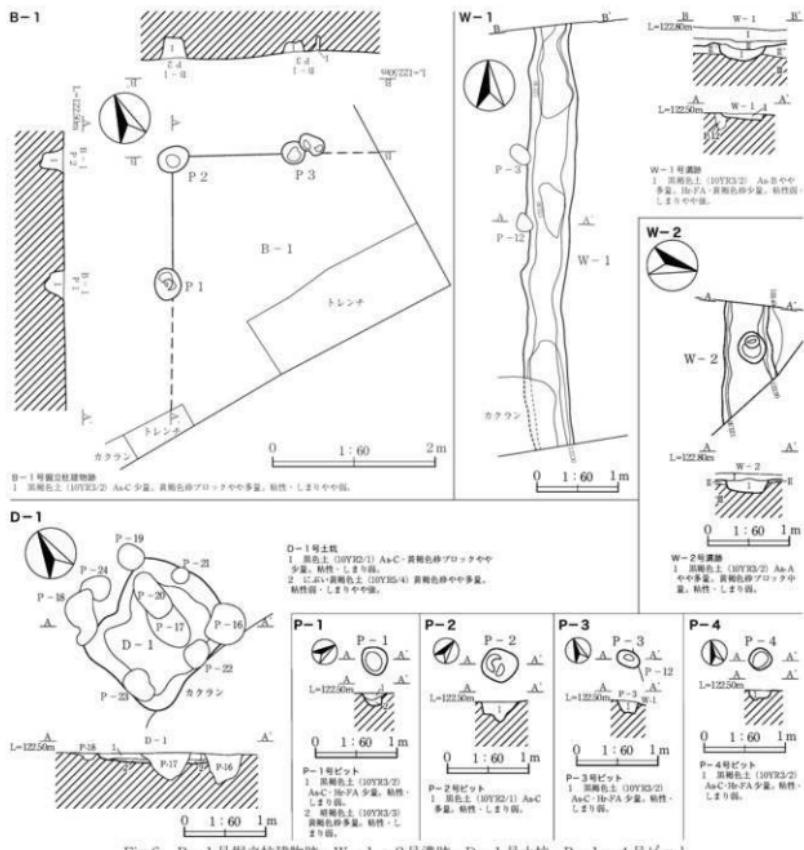
Tab. 2 土坑、ピット計測表

遺構名	位 置	長 軸	短 軸	深 底	平面形状	出土遺物	時 期	備考	遺構名	位 置	長 軸	短 軸	深 底	平面形状	出土遺物	時 期	備考					
D-1	X 39 Y 199	1.65	1.42	0.12	不規則形	土師器甕 P-16-21等が出土。	P-13	X 41 Y 199	0.67	0.66	0.23	(内輪)	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-1	X 39	0.38	0.32	0.08	円形	土器一等 As-C・Hr-FAを含む。	P-14	X 41 Y 199	0.28	0.27	0.19	円形	土器片等 As-Cを含む。									
P-2	X 39 Y 199	0.42	0.35	0.26	長軸方形	土器片等 As-Cを含む。	P-15	X 41 Y 199	0.27	0.23	0.15	不規則形	土器片等 As-Cを含む。									
P-3	X 39 Y 199	0.28	0.22	0.14	円形	土器片等 As-C・Hr-FAを含む。 As-Bを含む。	P-16	X 41 Y 199	0.50	0.45	0.26	不規則形	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-4	X 39	0.25	0.25	0.12	短軸方形	土器片等 As-C・Hr-FAを含む。 As-Bを含む。	P-17	X 41 Y 199	0.67	0.41	0.30	短軸形	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-5	X 39 Y 199	0.22	0.21	0.07	円形	土器片等 As-Cを含む。	P-18	X 41 Y 199	0.68	0.38	0.33	不規形	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-6	X 39 Y 199	0.28	0.26	0.28	円形	土器片等 As-C・Hr-FAを含む。 As-Bを含む。	P-19	X 41 Y 199	0.34	0.20	0.08	楕円形	土器片等 D1等が出土。	As-Bを含む。								
P-7	X 39 Y 200	0.27	0.36	0.08	不規則形	土器片等 As-C・Hr-FAを含む。 As-Bを含む。	P-20	X 41 Y 200	0.61	0.23	0.45	短軸形	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-8	X 39 Y 200	0.23	0.38	0.09	圓形	土器片等 As-Cを含む。	P-21	X 41 Y 200	0.21	0.20	0.10	円形	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-9	X 39 Y 200	0.27	0.26	0.13	円形	土器片等 As-C・Hr-FAを含む。	P-22	X 41 Y 200	0.34	0.29	0.23	不規則形	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-10	X 39 Y 200	0.29	0.31	0.19	圓形	土器片等 As-C・Hr-FAを含む。	P-23	X 41 Y 200	0.43	0.33	0.16	椭圆形	土器片等 D1等が出土。	Ae-C・Hr-FAを含む。								
P-11	X 39 Y 200	0.24	0.23	0.13	圓形	土器片等 As-Cを含む。	P-24	X 41 Y 200	0.60	0.22	0.07	短軸形	土器片等 D1等が出土。	Ae-Cを含む。								
P-12	X 39 Y 200	0.29	0.21	0.22	不規則形	土器片等 As-Cを含む。	P-25	X 41 Y 200	0.63	0.28	0.17	短軸形	土器片等 D1等が出土。	Ae-Bを含む。								

Fig. 8-1 の須恵器坏が出土している。口径に対して底径が大きく器高は扁平、底部外面は回転糸切り後無調整で、おおむね9世紀前半に比定することができる。①に分類できる遺構は、②と③によって切られる。以上の点と、覆土に含まれる火山灰の差異から、①は古墳時代、②は奈良～平安時代、③は中世以降の所産と推測した。なお、各遺構の計測値等については、Tab. 2に示す。

(4) 遺構外出土遺物 (Fig. 8, PL. 2)

遺構確認面である総社砂層漸移層（基本層序Ⅲ層）中からは、縄文時代前期後葉の諸磯b式期・諸磯c式期の土器細片が4片出土し、内2片を図示した（3・4）。また、擾乱の中から黒曜石片2片や陶器碗1片、須恵器坏4片、須恵器長頸壺1片（2）、土師器坏4片、土師器甕8片が出土したが、いずれも細片である。



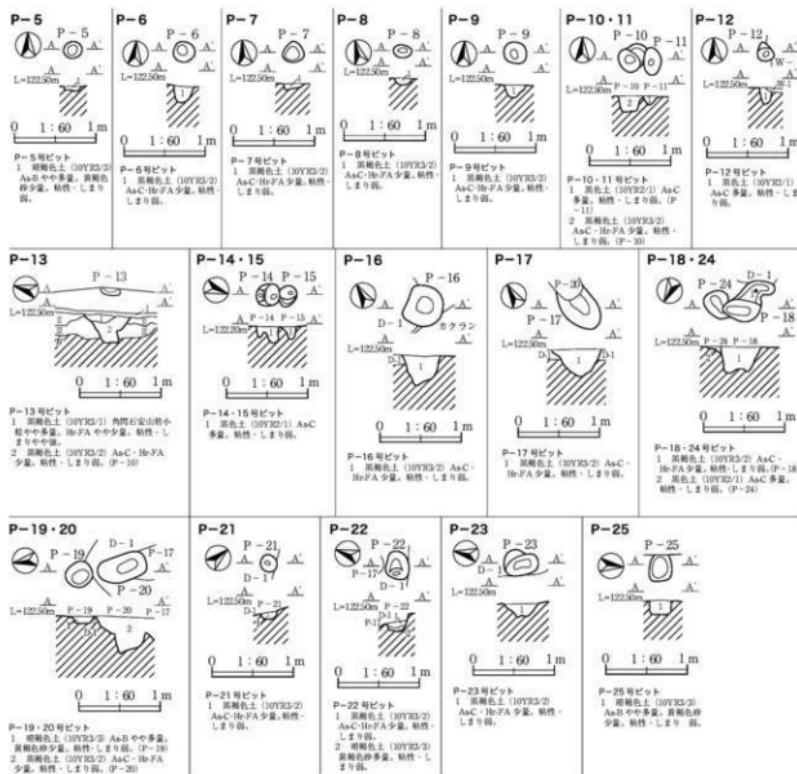


Fig. 7 P-5～25号ピット

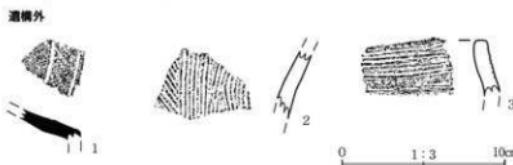


Fig. 8 P-18・遺構外出土遺物

Tab. 3 出土遺物観察表

P-18

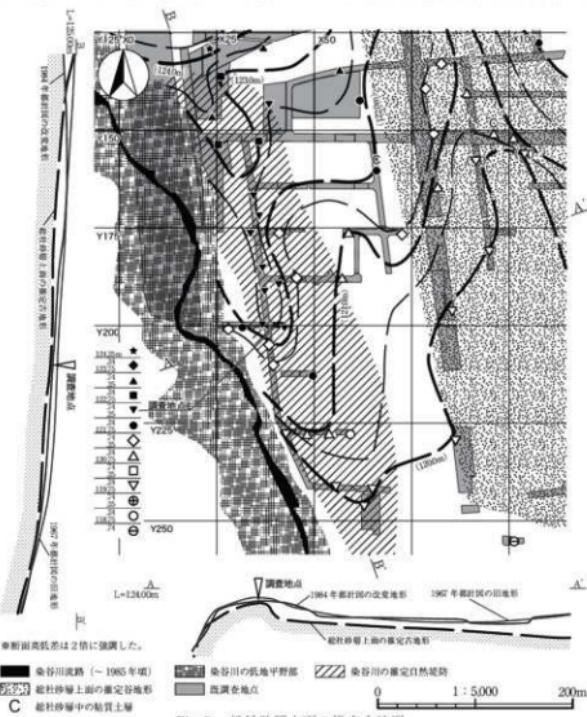
No.	出土位置	種別、断面	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形状、底、断面、文様等の特徴		残存状況、備考
									内径	外径	
1	No.1	泥質土器	(34.0)	(8.8)	2.8	泥質土、小磚	やや 崩壊	外：褐色 内：白色	口縁：朱色	底：朱色	13枚・底丸・1/2残存。
遺構外											
No.	出土位置	種別、断面	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	形状、底、断面、文様等の特徴	残存状況、備考	
1	残瓦	磚瓦	-	-	(1.9)	泥質土、小磚	崩壊	外：褐色 内：浅褐色	内縁：ロコロナジ 底：朱色	底丸・内縁ロコロナジ	破片。
2	夏型	陶土器	-	-	(1.1)	泥質土	良好	外：褐色 内：白色	底：朱色	底丸・内縁	破片・底丸。
3	春型	陶土器	-	-	(3.4)	泥質土、小磚	良好	外：褐色 内：褐色	口縁：朱色	底丸・平行丸溝	破片・底丸。

VI 発掘調査の成果と課題

本地点は染谷川の左岸に立地し、奈良・平安時代には、付近に上野国府城の西端が推定されている。隣接地点では、蒼海(13)で南北に伸びる道路状遺構が確認され、蒼海(8・13)では多量の縁釉陶器が出土している。加えて、上野国分僧寺・尼寺中間地域では、染谷川の旧河道内から多量の土器が出土しており、縁刻された記号の解釈から、国府城西端で執行された律令の祭祀の可能性が指摘されている。また、戦国時代には、西から染谷川を越えて蒼海域の城域へ入る、「五番旅」の切通しが付近に想定されている。このような歴史的環境にありながら、本地点で確認できた遺構や遺物は、とても少なかった。その要因として、本地点の表土層は非常に薄く、直下は総社砂層の上位付近まで削平を受けており、本来存在したであろう遺構や遺物の多くは消失している可能性を、調査段階で考えることができた。そこで本節では、本地点の周囲が元来、どのような地理的環境にあり、いかなる地形変化の過程を経て、現況の遺構密度が把握されるに至ったのか、周辺調査地点の基本層序と、古い都市計画図や航空写真、現状の微地形を参考に考えてみたい。

総社砂層の堆積と染谷川左岸自然堤防の形成 Fig. 9には既調査の基本層序観察地点と、総社砂層上端の標高を50cm単位で分類し記号で示した。そして、同一の標高域を繋ぐことで推定等高線を引いた。現在は平坦化と宅地化によって不明瞭だが、染谷川左岸には総社砂層が堆積した段階で、南北に延びる自然堤防が形成されていたようだ。本地点はちょうどその尾根上にあたり、東西約12m程度しかない本地点の、東西両端の基本層序で、総社砂層中の堆積に極端な差異が確認できたのは、そのためだろう。つまり、自然堤防頂部に、より近い東端部の総社砂層は安定したシルト質であるのに対し、葉理構造の発達した西端部は、総社砂層の堆積期間中に染谷川の堆積作用によって発達しつつあった自然堤防を示しているものと推測できる。

また、自然堤防の東側には、同一方向に伸びる谷地形が存在していたようだ。この一帯では、総社砂層の上位に粘質土化が確認できることから、湖沼化していた可能性がある。蒼海(18・44)や小見内Ⅸ・Ⅹ遺跡、草作Ⅴ遺跡では、この粘質土を目的とした、各時代の採掘坑が確認されている。なお、この谷地形は、蒼海



遺跡群の現況地形では確認にくいが、より北方には残存地形が旧道とともに確認でき、上流を辿ると、高崎市金古町字大塚付近で現在の牛池川に合することから、総社砂層堆積期間中のある段階で流れた、相馬ヶ原層状地を水源とする中小河川の名残りの可能性もある。

染谷川低地平野の形成と谷地形の埋没

上野国分寺・尼寺中間地域の染谷川河川敷部調査では、旧河道の下層に黒ボク土層と As-C 混入黒色土層が、中層には Hr-FA 層が確認されており、この頃には染谷川の流路は、小規模な変更はありながらも、現在の低地平野内に落ち着いていたようだ。一方、自然堤防の東側に推定される谷地形内の基本層には、黒ボク土層や As-C 混入黒色土層の厚い堆積が確認されており、この頃に谷地形の埋没が進行したものと考えられる。蒼海(17)、小見Ⅲ遺跡、草作Ⅴ遺跡など、谷地形周辺の調査地点で住居跡が安定的に分布するようになるのは古墳時代後期からで、この頃には、谷の残存地形として緩やかな低地が残りつつも、集落遺跡になっていたものと推測できる。

戦後の地形変化の影響 上野国府や蒼海城に伴う、歴史時代における地形変化の様相は検討したい。米軍や国土地理院が撮影した航空写真(本扉写真参照)を辿ると、戦後間もない頃に、染谷川自然堤防東側の谷地形は耕地整理が行われているが、1967 年の都市計画図の等高線には、区画整理された耕地の中に谷地形の名残をわずかに見ることができる。同じように航空写真からは、1970 年代には染谷川自然堤防上の宅地化が始まったことがわかる。Fig.10 には、1967 年と 1984 年の都市計画図に記された等高線を重ねて示した。本地点が、自然堤防の尾根上に立地することがわかるが、標高 1230 m の等高線を比較すると、1984 年には等高線が約 80 m ほど北へ後退しており、本地点はその変動の範囲内にある。つまり、宅地化に伴い自然堤防の頂部は、約 1 m ほど削平を受けていると推測することができ、このことが、本地点を周辺調査地点に比較して「分布の空白」ともいえる状況たらしめた要因と考えることができるだろう。

参考文献

- 木津博明 1988 「第3章 周辺遺跡」『上野国分寺・尼寺中間地域』 群馬県埋蔵文化財調査委員会
- 早田勲 1990 「第一章 第五節 前橋台地と広瀬川低地帯」『群馬県史』 史編纂室 1 原始古代 1 群馬県
- 松田他松、新井房夫 1971 「第一編 第三編 自然の風景」『前橋市史』 第一巻 前橋市
- 吉沢昭史 2016 「群馬県前橋市元總社地域における地形の形成と土地利用」『地域考古学』 1 号 地域考古学研究会
- 群馬県埋蔵文化財調査委員会 1992 「上野国分寺・尼寺中間地域(8)」
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査会 2007 「元總社蒼海遺跡群(8)」
- 前橋市埋蔵文化財調査委員会 2008 「元總社蒼海遺跡群(13)」
- 前橋市 1967 「1/2500 都市計画図」
- 前橋市 1984 「1/2500 都市計画図」

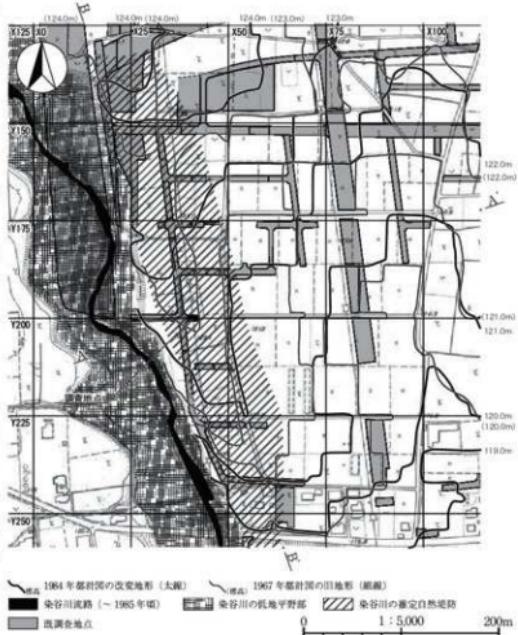
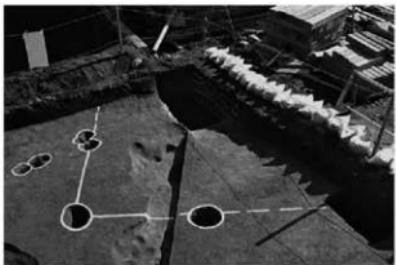


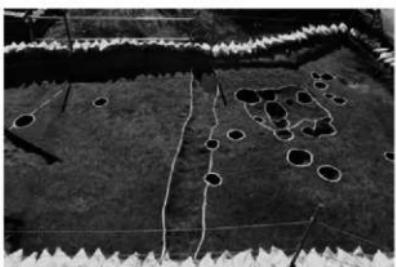
Fig.10 戦後の地形変化 (1967 年前橋市都市計画図に加筆)



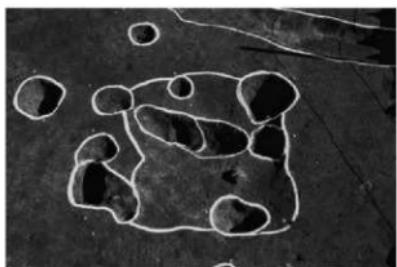
調査区全景（西から）



B-1 全景（北西から）



W-1 全景（北から）



D-1 全景（南西から）



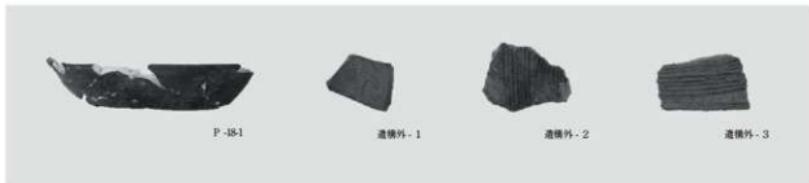
調査風景（東から）



基本層序A-A'（北から）



基本層序B-B'（北から）



報告書抄録

カタカナ	モトソウジャオウミイセキダン (120)							
書名	元総社蒼海遺跡群 (120)							
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	-							
シリーズ名	-							
シリーズ番号	-							
編著者名	小峰 篤・中村岳彦							
編集機関	技研コンサル株式会社							
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1-15-3							
発行機関	前橋市教育委員会							
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4							
発行年月日	2016年9月30日							
フリガナ	フリガナ	コード	位置			調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
元総社蒼海遺跡群 (120)	前橋市元総社町 1411-1ほか	102021	27A223	36°23'12"	139°1'49"	20160131 ～ 20160205	85m ²	前橋都市計画事業 元総社蒼海地区 画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
元総社蒼海遺跡群 (120)	集落	縄文時代 平安時代 中世	掘立柱建物跡1棟 溝 土坑 ピット	2条 1基 25基	縄文土器 須恵器 土師器			

元総社蒼海遺跡群 (120)

前橋都市計画事業元総社蒼海地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年9月18日 印刷
2016年9月30日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4
TEL 027-280-6511編集
印刷 技研コンサル株式会社
朝日印刷工業株式会社